



TITLE:

実践型地域研究ニューズレター：ざ いちのち No.26

AUTHOR(S):

京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア
研究所：在地と都市がつくる循環型社会再生のた
めの実践型地域研究

CITATION:

京都大学 生存基盤科学研究ユニット 東南アジア研究所：在地と都市がつくる循環型社会
再生のための実践型地域研究. 実践型地域研究ニューズレター：ざいちのち No.26. 実践
型地域研究ニューズレター：ざいちのち 2010

ISSUE DATE:

2010-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/147113>

RIGHT:

まちやむら、そこに住む人びと（＝ざいち）の、
知恵や生き方（＝ち）から学び、実践する活動です。

ざいちのち

実践型地域研究ニューズレター No.26 2010年12月

京都大学

生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

守山市駅前

朽木フィールドステーション

「焼畑は重労働」だろうか？

滋賀県立大学／朽木 FS 黒田末寿

1 焼畑に対する誤解と理解不足

山の斜面を燃やして耕作する焼畑には、さまざまな誤解というか理解不足がつきまといっている。たとえば焼畑は、a)森林破壊・環境破壊、b)収奪農法で土壌を貧困にする、c)低生産、d)雑穀や根菜を数年間作って放棄する、e)重労働などである。これらが一般の了解として通るのは、近代農法や現代生活の立場から表層的に見てしまうからだだろう。もう何度も書いていることだが、地形を考慮して小規模でおこない休閑期を十分とれば、焼畑は持続可能で、生産面でも作業に見合う結果が得られ、かつ生物多様性の維持などに役立つ。また、焼畑にはいろんなやり方がある。たとえば、東北には、熟成した下肥と灰と種を混ぜて施肥と薄蒔きの両方をおこなう「ぼった蒔き」という方法があり、また、白山麓などでは常畑並に手を入れてヒエの生産量を平地並みに上げていたという記録もあって、b)や c)に直接反論するような焼畑農法もある。

d)が誤解というのは、焼畑は、根菜や雑穀の作付け後のさまざまな利用も見通しておこなわれているからである。山菜やヤマノイモ、果実やツルなどの採集場として利用するのはもちろん、地域によっては、ミツマタ・コウゾなど紙の原料になる灌木、あるいは杉を植え、「耕作放棄後」それらを利用した。余呉では、ヤマグワが自生してきて養蚕に利用したし、四国や九州ではヤマ茶が育って番茶にする地域があった。したがって、「耕作放棄後」とは根菜や雑穀の作付けの観点でいうことで、実際の焼畑は長期的に山を利用する農林業の見通しでなされていた。しかし、農林業といえば通常の農業と木材生産業をイメージしてしまう。山菜や灌木も林産物なのでそれらの生産・利用も林業なのだが、一般にはそうは思われない。だから、火入れも含めて山を長期的に

利用する生業は、林業とか山業と表現したほうがいいと思う。

2 焼畑が「重労働」という「誤解」

さて、e)が誤解と言え、滑り落ちるような急斜面で伐採や鋤入れをし、暑さなかに火を扱って汗が滝のように出る作業がなぜ重労働でないのかと反論されるだろう。しかし、実際に何度かやってみると違う実感をもつ。斜面での草木の伐採や火の扱いは危険でひやひやするが、楽しく、慣れれば楽にこなせる。現に山仕事や農作業に慣れている永井邦太郎さんは74歳で足も悪いが、楽々と作業をこなしている。今北哲也研究員も同様だ。こういう作業を「重労働」と表現するのは、おかしいと感じる。その疑問は、たんに作業の面白さや熟練によるだけではない。

「労働」という言葉は明治期の **labor** の翻訳である。ヨーロッパでは古代ギリシャ・ローマ時代から身体を使う作業は奴隷がすることという労働観があり、**labor** は強制された単純で苦痛な作業を指す（自主的な作業は **work**）。資本主義のものと働きは **labor** で「重労働」はその極だ。人間は、生命を殺しも蘇らせもする危険な火をコントロールすることで人間になった。だから、大げさな言い方になるが、焼畑は人間と自然の関係の原点に戻る生産活動なのだ。一方、資本主義経済はそういう人間性を無視し、人間の働きを生産効率に還元する。その席卷で焼畑は消えた。いま、焼畑に重労働という労働概念を当てはめれば、焼畑をおこなってきた先人の技や喜びを無意味にし、生産性をも過小評価し、人間の営為をすべて金に換算することになりはしないか。生存基盤とは「人間」の基盤であることを確かにしたい。



写真：鋤で浅く耕し休憩。
（中河内 撮影：小坂康之）

筏がつなぐまち ―保津川筏復活プロジェクトの意義を考える②―

大阪商業大学 原田禎夫

今回は、保津川筏復活プロジェクトが亀岡の人々と保津川とのかかわりに与えた影響を考える前に、今も続く保津川下りの船頭衆と川とのかかわりについて考えてみたい。

私の手もとに「日本の民俗②山と川」^[1]という 1 冊の本がある。この中で、かつての奈良県吉野の「川路の浚渫」の図とともに、「かつての流送がかれら（筏師）たち自身の河川管理により維持されてきた」、またこうした作業が「日常的な細やかな河川管理を可能にしてきた」と、述べられている（傍点筆者）。しかし、こうした人々と川とのかかわり方は、少なくともこの保津川では決して過去のものではない。

川底に突き出した岩から舟を守るための胴木と呼ばれる丸太の設置、航路を確保する水制工の修復や川底の浚渫など、舟の航行を妨げるさまざまな危険を回避するための土木工事を、保津川下りの船頭たちは「川作（かわさく）」と呼んでいる。その詳しい内容については、保津川の世界遺産登録をめざす会（2009）^[2]に詳しいのでここでは割愛するが、こうした作業は定期的に、また大水や渇水期には臨機応変に、船頭衆の手で行われているのである。

ここで注目すべき点として、河川法上は管理者である京都府知事の許可が必要であり、保津川においても形式的にはその手続きがなされている。しかし、実際にこれらの作業が不許可となることはなく、いわば慣例として行政機関は追認する形に留まり、実際の作業の実施の可否は、むしろ漁協との協議による部分が多い。船頭たちへの聞き取り調査でも、「わしらは河川法なんちゅう法律ができる前から舟を流しとる」、「河川法のほうが後から出来たんや、それでとやかく言われても知らん」、「法律は法律や、せやけどこの川にはこの川のルールがある」といった声が多くあった。また、2007 年にはカヌーで川を下っていた男性が胴木に引っかかり負傷するという事故が起こったが、当時の土木事務

所の担当者は「もし管理者の責任を問われたら厳しいところだったが、かといって遊船に胴木の設置を許可しないわけにはいかない」「昔からのことですから」と述べている。

また、保津峡は保津川下りの船以外でのアクセスが困難な場所がほとんどであり、管理を担う行政機関の職員も、川の状況に関して船頭ほどの情報を持ちえないのが実情である。もちろん、峡谷という特殊な地形であり治水や利水の優先度もそれほど高くなく、また京都府立自然公園に指定されていることもあって近代工法を用いた河川管理がそれほど行われてこなかったという面もある。

このように、船頭たちは 400 年以上も続いてきた「川作」を通じて、保津川の実質的な管理者としてのレジティマシーを獲得してきたとみることができる。こうしたことは、数ある全国の他の川下りにはみられない大きな特徴でもある^[3]。しかし、この 20 年ほどの間に、特に行政機関との関係性において、微妙な力関係の変化も生じている。次回はこうした点について考えてみたい。



写真：保津峡における、「水寄せ」と呼ばれる石組みを修復する「本川作」のようす。この石組みは、江戸時代初期の保津川開削時から何度も修復されながら現在も使われている。（写真提供：石田亮太氏）

脚注

- [1] 湯川洋司・福澤昭司・菅豊、「日本の民俗 2 山と川」、吉川弘文館(2008)
- [2] 「保津川下りの今昔物語 ―綱道に残る船頭の記憶―」保津川の世界遺産登録をめざす会(2009)
- [3] たとえば「観光舟運による都市再生・地域活性化フォーラム」(主催：特定非営利活動法人 都市環境研究会、2010 年 11 月 4 日、東京ウィメンズプラザ)では、鬼怒川ライン下りの担当者から、「洪水の後に河道内に留まり、舟の航行の妨げになっている岩を動かすことも、河川法を盾に行政が許可してくれない」という報告があった。同様の問題は、天竜川や木曾川などでも生じている。

「ウルリンつかみ」とおすそ分け

生存基盤科学研究ユニット 藤井美穂

「ウルリンつかみは、難しいでっせ」。開発（かいほつ）集落（以後、在所と記す）のBさん（男性77歳）は語る。ウルリンとは、野洲川の恵みの一つである川魚であり、体長は約3cmで小さくて黒い。一般に「ウルリ」（以降ウルリと記す）と呼ばれており、ヨシノボリの稚魚である。だが、在所では、かつて琵琶湖で漁を経験した人も含めて、住民はウルリがヨシノボリとは違うと話し、ウルリを成魚として認識している。

「あつ飯（炊きたてのご飯）の上にウルリンの『ころ炊き』をかけて食べるんや。うまいで」（B氏）。『ころ炊き』とは、ウルリに砂糖、醤油、ショウガの千切りだけで煮たものであり、在所ではウルリはおかずであった。だが、現在、「ウルリンつかみ」をする人はいない。在所にある佃煮屋では、琵琶湖で獲れたウルリを佃煮にしたものが「ゴリ佃煮」として売られているだけである。

次に、ウルリの習性を熟知した在所の多くの高齢者の男性たちによって、野洲川で行われた「ウルリンつかみ」の方法について述べたい。

野洲川の改修工事が始まる頃（1970年代）まで、男性たちは、付近の同川の南流で「ウルリンつかみ」をしていた。8月下旬から9月初旬までが「ウルリンつかみ」の最盛期である。「ウルリンな、あいつは賢いで。おひさんがあがっている間、行動しよるが、夕方になるとポンと姿を消しよる。あいつらな、水の流れをよう知っとるで」（B氏）。

「ウルリンつかみ」は、一般に一人で昼間行われ、野洲川の浅瀬に長さ10~15m、幅30cm、深さ20cmの魚道作りから行われるため、重労働だった。まず、ウルリが好む流水とウルリを捕りやすい場所を見て回る。底が砂地の川の中に、「ジョリン」（鋤簾・じょれん）という水路のゴミや泥土をかきあげるための用具で魚道を1本つくった。琵琶湖からのぼってくるウルリが土手筋を好む習性を用いて、必ず魚道の土手の片方は川の土手を利用した。

魚道には、「イッパチ」をしかけた。イッパチは、川を竹簀（たけす）でせきとめて魚を捕る漁法であるヤナ（筥）の一形態であるが、最近は見られないという。魚道の出口になる上流に1枚の竹簀を漢字の「一」の形ではり、下流である入り口に上流を上

にして「八」の形に2枚の簀をはるので「イッパチ（一八）」と呼ばれる。竹簀は篠竹を割らずに用い、幅1.2m、高さ40~50cmの大きさである。小さい川でも、竹簀の大きさを使い分けてイッパチを用いて、ガンゾウやフナを獲っていた。

2010年7月、Aさん（男性85歳）と一緒に野洲市の野洲川にウルリを獲りに行った。同川の水量が少ない砂防壁の側面にできた幅30cmの溝がウルリで真っ黒になっており、そこから砂防壁の壁面を沿って少量の流水に向かってウルリがのぼろうとしていた。

「こうしてな、こいつらここにのぼりよるから、ここで獲ったらええんや」（A氏）。

現在、Aさんは気が向いたときに、砂防壁の前にかがんでウルリを網ですくって、「ウルリンつかみ」をする。在所にもどると早速、Aさんは同年の2件の家に行って、ウルリのおすそ分けをした。「いや〜、めずらしい。どこで獲ったん。おおきに」「野洲川のウルリンは一番やな。里川にもおったけどあかん、泥くさい。ころ炊きするわ」と満面の笑みで話したのは、Aさんと同年である夫（Cさん）が自宅で療養中の近所の女性である。Aさんもととても嬉しそうに話していた。「Cちゃんはどうや？これ炊いてな食べさしたって」とAさん。

日頃、Aさんが気になっているCさんの病状について、訪問して単刀直入には聞けないが、こうしてウルリを介して、さりげなくAさんはCさんだけではなく、その家族をも気遣っている。おすそ分けをしたあと、「どや、喜んでもらえるんは、ええことやろ」とAさんが私に語った。聞き書きで、かつて川で獲れた魚は、近所におすそ分けをすると聞いてはいた。「ウルリンつかみ」からおすそ分けまでの一連をAさんに同行することにより、おすそ分けが、単なる収穫した物の分かち合いというよりは、むしろ、在所におけるコミュニケーションの大切な方法だと確認できた。



写真1: 野洲川の砂防壁でウルリを獲るAさん。



写真2: 在所に流れる里川のうりは砂があり、まずいが、野洲川のウルリはおいしいと言われている。

■第30回 定例研究会

1. 日時：平成22年12月27日（月）14:00～17:00
2. 場所：守山FS（滋賀県守山市梅田町12-32）

3. 発表者：鈴木玲治（京都大学生存基盤科学研究ユニット）

発表内容：「行政・自治会・大学の協働による川づくり 一守山市大川の事例一」

*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室（担当：鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

人も自然も元気な山村を目指して
一島根県浜田市弥栄町における取り組み一
島根県中山間地域研究センター 福島万紀

一昨年の春から、島根県の西部に位置する浜田市弥栄（やさか）町に暮らしながら、山村に生きることの豊かさを問い直すフィールドワークを続け、地域の未来を描く実践研究に携わっています。弥栄町（旧那賀郡弥栄村）は、人口1,492人、総面積105.5km²の小さな山村です。面積の約86%が森林で、そのうちの約7割がコナラやアベマキなどブナ科が優占する落葉広葉樹です。

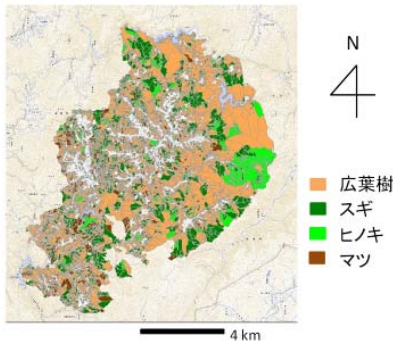


図1 弥栄の森林資源の分布状況。
（森林基本図2005年を元に作成）

弥栄では、中国山地の他の地域と同様に、木炭を燃料とするタタラ製鉄が明治の終わり頃まで行われていました。明治以降も、木炭生産は続けられ、伐採と、切り株からの自然再生を繰り返す山林利用を行ってきました。1950年代に石油やガスが急速に普及すると、木炭生産は減少し、広葉樹の伐採と再生を繰り返す、人と自然の共生のバランスが変化しました。伐採されないまま30年以上経過したブナ科の広葉樹の大部分が、「ナラ枯れ病」^[1]に感染し、数年のうちに枯死しようとしています。ナラ枯れ病を媒介するカシノナガキクイムシは大径木を好んで繁殖するため、感染木を伐出すると共に、定期的に伐採して切り株からの萌芽更新を促し、ブナ科広葉樹の高齢化・大径木化を防ぐことが必要です。なので、「ナラ枯れ病」をどのように乗り越えていくか考えることは、山の資源の活用を考えることと、密接に関連しています。



写真1: 弥栄の里山に広がるナラ枯れ。(2010年10月)

炭や薪の材料には、コナラやクヌギなどブナ科の広葉樹が一番よく、弥栄ではこれらの木を「マキノキ」と呼びます。薪は、高齢者の家庭で薪風呂などに利用されています。自宅に炭窯をつくり、自家用

の炭を焼く人が何人もいます。原木しいたけ栽培にも「マキノキ」を利用します。ところが、ナラ枯れ病は全面的に拡大しているため、そのような弥栄町内の小規模な木材利用の継続だけでは、食い止めるには至りません。

昨年の春、ナラ枯れなどの病虫害木や林地残材の活用を目指し、弥栄町の小規模林家と都市で薪ストーブを使う方々が任意団体を結成し、継続的な「薪割り会」を行っています。薪ストーブを使用する方々にとって、薪割りは楽しみのひとつ。「割った薪を高く買うよりも、割っていない丸太を安く買いたい」という方が多いことがわかりました。さらに、薪を割る手間のない山林所有者が薪が欲しい人に材を提供し、割った薪で対価を支払うような仕組みが構築できないかを考えています。



写真2: 弥栄の小規模山林所有者と都市の薪ストーブ使用者が協働で薪割り会を行っている。(2010年5月)

弥栄の広葉樹の山のほとんどが、個人所有の山です。自分の持ち山を自分で管理する林業をどのように見直していけるかが、これからの課題です。「マキノキ」以外の雑木も、みんなでたくさん量を集めれば、広葉樹のチップとして売り出す仕組みを構築することが可能です。先月、高知県のNPO法人「土佐の森救援隊」の事務局長の中嶋健造さんをお招きし、「山からはじまる地域づくり」をテーマに勉強会を開催しました。かつてはあたり前であった、持ち山を自分で伐採・管理する「自伐林業」を実践し、活性化する活動を行っています。軽トラック、チェーンソー、ウィンチなど、小型の林業機械を組み合わせ、地域で力を合わせて材を集める自伐林業についてご紹介いただきました。「山を活用して収入を得て、人も自然も元気になる」を目指し、実践型の地域研究を進めていきたいと思います。



写真3: 「山からはじまる地域づくり」をテーマにした勉強会。自分の持ち山を伐採・管理する林業の可能性について力強い実践事例を紹介いただいた。(2011年2月8日)

脚注

[1]カシノナガキクイムシ (*Platypus quercivorus*) という日本に在来の甲虫が病原菌を伝播することによって、ナラ類やシイ・カシ類などのブナ科広葉樹が枯死に至る病気。